

は、摂氏53度以上になる。作業員も疲れ切り、毎日脱水症、熱中症をきたしながら、必死で働いた。皆さんには「立派だ」と思うだろう。確かに立派だが、それ以上に現地の人達にとっては命の問題が差し迫っていた。用水路ができれば自分たちはここで生き延びられる。用水路が成功しなければ、また元のみじめな難民生活が待っているという、いわば生死の瀬戸際で彼らは力が入ったのだと思う。

現在、ガンベリ砂漠を開墾している(現在は試験農場としている)。いつかペシャワール会が活動を終える日が来るし、私自身が死ぬ日が来る。その後残った百数十名の職員はどうしたらいいのか。そういうことで用水路の末端に彼らが定住できる村をつくっている。しかし、砂漠なので単に水がないだけではなく、もう少し砂嵐が来る。それを防ぐために、全長約5km・幅300mにわたり、現在植林を行っている。水さえあれば、砂漠でも植林はできる。この砂防林は2・3年で数mに成長し、随分開墾しやすくなつた。

ここで、昨年6月から田植えが始まった。2年前までここで田植えをするなど、誰も考へることができなかつた。それまでは、ガンベリと言えば、みんな死の谷だと思っていた。ところが、水が来ることによつて、見事に復活しつつある。

九条の会 兵庫県医師の会 市民講演会

[中村哲医師が語る] アフガンの大地から観る 明日の世界と日本



講師：中村 哲医師
PMS総院長・ペシャワール会現地代表

アフガニスタンの地で
中村医師は、
用水路建設をはじめた。

——それは一つの医療行為であつた。

水不足を解消しようと堰を作つている。それも押し掛けてやつたことはない。地域住民が「お願いします」と言うのを、「こちらで予算を組み技術的なことを考慮しながら、住民と一緒に一体となってやつてきた」。そうは言つても人間のすることはたかが知れない。先生は戦争が怖くないのか。米軍が怖くないのか。テロは怖くないのかと聞かれる。怖いけれど、自然の怖さに比べたらました。相手が敵であつても、人間であれば交渉したりするゆとりがあるが、水はしゃべつてくれない。日本語もしゃべらないし、現地のペルシャ語もしゃべつてくれない。こっちから推測する以外にない。しかも、自然は絶対にうそをつかない。悪人と善人を区別しない。善い人でも、悪い人でも同じようにいたらげてしまうのが自然である。私たちも堤防の水位を決めるにあたつて、昔の人々の話から、過去の洪水を参考にして、100年に一度の洪水に耐えられるよう設計していたつもりが、それをやすやすと越えてしまう大洪水が昨年発生した。私たちが考える基準値は当然にならなかつた。人間自身の合意でもつて自然に対処することはできないというのが、結論だ。

日本が作つたこの斜め堰の技術、この設計思想が大幅に生かされて、とにかく危ないところに人は住まない。大事なものは危ないところに作らない。自然には逆らわない。暴れるときは犠牲をできるだけ少なくして、人間はそれに耐えるべきだ。力強く自然と対決してはいけない。この設計思想が、アフガニスタンで大きな力を發揮している。

うれしかつたのは、私たちの努力が、今年になつてやつと実を結び始めたことである。着工から8年にして

て、東北アフガニスタンの一角であるジャララバードが、小麦の大豊作に恵まれて、小麦価格が約2割落ちるという現象を生んだ。これによつて、少しずつ自給自足の平和な農村生活が復活することになった。田舎の人だけでなく、都市に住む貧しい人たちにとっても、2割も小麦の価格が落ちるということは食費が2割減るということだ。職員たちの収入の約8割は食費に当たれていたので、これは人々が暮らす上で大きな助けになり、うれしかつた。

この27年間、いつも考え続けてきたのは、私たちは貧しい人を助けるとか簡単に言うけれど、助けられる貧しい人々の方が明るいのはなぜなのか。日本からアフガニスタンのために何かをしなといけないと思ひ駆けつける若者の方が暗い顔をしている。人間は何をもつてみじめとするのか。そして、人間としてこれは最後まで手放してはいけないものは何か。なくともいいものは何かについて、一つのヒントを得たような気がする。

「中村哲医師が語る」

アフガンの大地から観る
明日の世界と日本

発行 兵庫県保険医協会

〒650-10024

神戸市中央区海岸通1-2-31

神戸フコク生命海岸通ビル5F

電話 (078)393-1801

FAX (078)393-1802

発行日 2011年10月1日



写真1 アフガンの山々

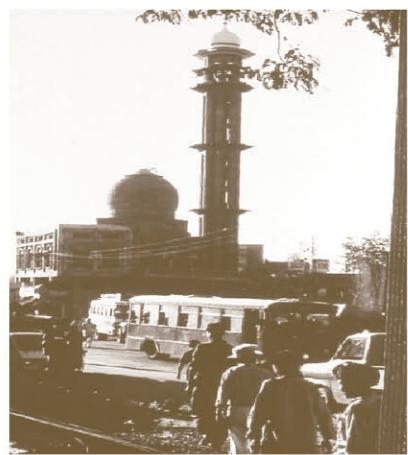


写真2 モスクワ

アフガニスタンとイスラム教

口さえ把握されていないところで、われわれが考える民主主義が通用するのか基本的な疑問である。もう一つは、高い山の雪によって、乾燥した大地に2,000万人以上の人々が暮らししているということである。雪や何万年もかけてできた氷河が夏に溶け出しで川沿いに豊かな実りを約束している。何千年も、何万年も人も動物も植物もそうやって命をつないだ。アフガニスタンの有名なことわざ「アフガニスタンでは金がなくても食つていけるが、雪がなければ食つていけない」というのは、そういうことである。高山水は、あらゆる意味でアフガニスタンの1つの象徴だ。

貧富の格差

スタンという国家をまとめているのがイスラム教だ。アフガニスタンには私たちが想像するような国家権力はもともとない。警察権力もない。地域のことは地域で決めるという自治が徹底して行われてきた。私が日本の新聞を見て非常におかしいと思うのは、日本が警察組織を作るのを支援しているということだ。

アフガニスタンの各部族は、とにかく自分のことは自分でやる共同体村落で、その共同体の中心になるのがモスクだ(写真2)。これが地域の要になり、もめごとを解決し、あるいは楽しい行事を催す。大事な政治的な決定もここで行われる。

貧富の格差

アフガニスタンでは、貧富の差が甚だしい。私たちが現地に行って非常にむなしい思いをするのは、軽い病気でもロンドンや東京、ニューヨークに行って治療を受けることができる一握りの人々がいる一方で、99.99%の人々は数十円のお金がなくて薬が買えずに死んでいくことだ。

現地の流儀に従つて、医療活動を行ふ

が流暢に話せて、外国人におべつかを使おうのが上手な人の意見がどうしてもアフガニスタンの意見として世界に発信されてしまう。敗戦直後の日本のようにた。医療人としては、いかに少ないお金で、いかに多くの人に恩恵を及ぼすかという特別の工夫をしなければならない。

現地の流儀に従つて、医療活動を行う

私たちの活動は、1984年に始まつたペシャワールのハンセン病コントロール計画に参加するという形で始まつた。当時は、本当に何もない中で悪戦苦闘し



写真3 診療を行う中村医師

は、いかに少ないお金で、いかに多くの人に恩恵

が流暢に話せて、外国人におべつかを使おうのが上手な人の意見がどうしてもアフガニスタンの意見として世界に発信されてしまう。敗戦直後の日本のように。医療人としては、いかに少ないお金で、いかに多くの人に恩恵を及ぼすかという特別の工夫をしなければならない。



写真3 診療を行う中村医師



写真3 診療を行う中村医師

九条の会 兵庫県医師の会 市民講演会

[中村哲医師が語る] アフガンの大地から観る 明日の世界と日本

2011年5月15日に、中村哲先生を講師に開催した九条の会・兵庫県医師の会市民講演会の詳報を掲載する。(文責・編集部)

アフガニスタンという国は、日本人にとって最も分かりにくい国の一つだ。私たちの活動を紹介し、現地で何が起きたのか、今何が起きつつあるのか、これら何が起こるのかを考えたい。

私たちの活動は、ペシャワール会という名前が示すように、かつてパキスタンのペシャワールに拠点を持っていた。しかし、3年前にペシャワールで大きな市街戦があり、一次閉鎖せざるを得ない状態になつた。それで、現在はアフガニスタンのジャララバードを拠点に主にアフガニスタンだけに限定した活動を行つている。それまでは、パキスタンでも自由に活動をしていたが、テロ戦争以後この地域が米軍のターゲットになり、私たちの活動も次々と縮小せざるを得なかつた。現在ジャララバードの拠点に150名の職員がいる。そのうち約100人が用水路で働く職員だ。これを財政的に支えるのが日本のペシャワール会だ。全国で約1万数千人の方々が私たちを支え、現地の活動に年間3億円にも上る活動費を賄つている。

PMS(ペシャワール会)の活動地域

なぜアフガニスタンとパキスタンにまたがって活動しているのかと言えば、実はこの地域は言葉も民族も文化もほとんど同じところだ。それを100年前にヨーロッパの列強が勝手に国境線を引いてしまった。実際には、パキスタン側に約1,500万人、アフガニスタン側にも同じ数のパシュトゥーン人が住んでいて、行き来は今でもほぼ自由である（図1）。

アフガニスタンと山脈

アフガニスタンのことを語るには山を抜きに語れない(写真1)。東のヒマラヤ山脈をずっと西に行くと、カラルロム・ヒンズークシ山脈がある。世界の屋根のちょうど西側にあるのがアフガニスタンと考えればいい。アフガニスタンは、日本の約1.7倍の面積の国土を持つが、ほとんどがヒンズークシ山脈で占められている。だから、古来アフガニスタンは難攻不落の要塞であった。山脈はそういう地理的条件を提供している。いろんな風俗や風土を育んできた。1つは、アフガニスタンでは、私たちが考えるような貨幣を中心とする経済は存在しない。この広大な山岳地帯は、谷ごとに民族が分かれて住んでいる。良く言えば地域の自治制度が非常に濃厚で、それぞれが自給自足で生きられる共同体だ。そうした共同体の集まりが、一見国家的な集團を作っているのがアフガニスタンの実態だ。私が日本について不思議に思うのは、「テモククワシ」というが、「こんな山の中で、選挙を行うなど不可能である。人



図1 パキスタン北西辺境州

ても、それを善悪

や優劣に分けて裁
かないと」ことを一つ
の鉄則としてきた。

例えば、写真4
のような女性のか
ぶり物は診療には

不便なものである
が、私たちは現地
で社会改革を行お
うとは絶対に思わ

ない。これは、彼らが自然に変えていくべきもので、外
国人の私たちがとやかく言うべきものではない。むし
ろ、現地の風習や習慣に合わせることが大切だ。なぜ
はない。外国人が犯しやすい過ちはこの点で、「こんな
のは許せないよね」と言って地元の人たちと衝突す
る。私が言いたいのは、「あなたは自分の思想が大事な
のが、それとも患者が大事なのか」ということだ。

とは言つても、どんな文化もそれぞれに抜け道があ
る。女性を診療できないことはない。流儀に従つてや
ればできることはたくさんある。例えば、女性患者の
診療については、女性の医療ワーカーなら自由自在に
できる。だから、初めのころ医療関係の女性の看護師・
検査技師などが随分と活躍した。こうして私たちはそ
の地域に溶け込むというか、地域の人々を私たちの尺
度で裁かないことを一つの鉄則としてきた。

アフガン戦争

1984年、私がペシャワールに行つた時はアフガ



写真4 イスラム教徒の女性

ン戦争の真っ只中だった。アフガン戦争というのは1

979年12月、当時は世界最強と呼ばれたソ連陸軍の
精銳部隊約10万名が大挙してアフガニスタンに侵攻
したことに端を発する戦争だ。世界中がソ連の侵略に
対して非難を行つたが、600万人が難民として国外
に移動する悲劇を生んだ。ペシャワールという町はパ
キスタンの町だが、300万人の難民が流れてきて、
私たちも医療者の立場から自然とアフガン問題に巻
き込まれていったのである。

初めのころは私たちは、難民キャンプで細々と医療
活動を行つていたが、ここで私たちは方針の大転換を
した。私たちが行つてきたハンセン病のコントロール
が、実は先進国側がつくったもので、アフガニスタンの
国情には合つていないということだ。つまり、ハンセン
病というものは、一般に貧しい地域に多く、ハンセン病が
多発するところは同時に他の感染症も多い。腸チフス、
結核、マラリア、テング熱、リーシュマニア症など、あら
ゆる感染症の巣窟であることが多い。しかも、そういう
た貧しい村々から病院までは非常に遠く、何日もかけ
てやつて来る。まして、フォローアップなどはとてもで
きない。フォローアップというのは、たとえば、ハンセ
ン病では1年も2年も続けて患者に治療薬を飲ませる
ことだ。それで、私たちが得た最終的な結論は、ハンセ
ン病の多発地帯に診療所をできるだけたくさん作ること
だ。すなはちアフガニスタンの山奥の貧しい
村々に一般的な病気を診ることができるような診療所
を作つて、そこでハンセン病も特別扱いせずに、いろん
な感染症の1つとして診るという方針を打ち出した。

その後、1988年5月からソ連軍の撤退が開始さ
れ、9ヶ月で撤退を完了した。ソ連軍の撤退の後、不思
議なことは外国人がいなくなると、騒乱も収まつてき
た。私たちはそれに合わせて次々と診療所を開設して
いった。そうして年月が流れ、15年経つたところでは、先
が長いことを悟つた。ハンセン病は確かに先進国で
は「減少の傾向を示している」とか、「コントロールさ
れた」と発表されているが、実態はハンセン病が根絶
されたのではなく、ハンセン病の診療施設が根絶され
たのだ。つまり、世界的な話題になつてゐる間はその
病気に関心が集まり、発見率が上がるけれども、関心
がしほむと発見されなくなつてしまふ。実際、私たち
が診ていても減つたとは思えない。少なくともアフガ
ニスタンやパキスタンの北部の山岳地帯では、患者が
増えることはあっても、減ることはない。それで私たち
は、「1つの診療施設でもいいので、そこに張り付いて
じつと患者を診続けていく」ということで、199
8年4月、ペシャワールに病院を設立し、ここを基地
としてアフガニスタンとパキスタンにまたがりながら
活動を展開する体制を整えた。

日露戦争とヒロシマ・ナガサキ

アフガニスタンでは、「日本人です」と言つと、親切
にしてくれる。単に日本人であるだけで命拾いをした
り、仕事がうまくいくことは数知れずあつた。なぜ日本
本人がそんなに親切にされるのか。彼らが日本について
想像するものは、2つ。日露戦争とヒロシマ・ナガサ
キだ。ヒロシマ・ナガサキは現地で非常に有名でどん
なに山奥でも皆知つてゐる。100年前のアジア世界
を想像してほしい。当時アジアでは、日本とアフガニ
スタンとタイの他、一部の緩衝国的な小さな国を
除くと、ほとんどが歐米列強の植民地ないしは半植民
地であった。そこには極東のちっぽけな日本が、ことも
あろうじて当時の大国の一つであるロシアと戦争を始
めた。戦争の良し悪しは置いといて、世界中で考えた
のは、「かわいそうに、日本も植民地になるだろう」と
いうことだつた。しかし勝つたとは言えないまでも、
撃退したことは事実だつた。当時、植民地であつて
いたアジアの人達に希望を与えた。アジアの指導者た
ちは狂喜した。それが今でもアフガニスタンでは語り
継がれていて、相手がどんなに強くても理不尽なこと
に屈しない不撓不屈の日本という美しい誤解が、私を
守つてくれたのだ。

それともう一つは、ヒロシマ・ナガサキについて、彼ら
はよく知つてゐる。「(太平洋戦争で)日本はあれだけの
惨禍を被りながら、見事に戦後復興を遂げた。羽振りが
良くなつた国は必ず戦争をするはずなのに、戦後一度も
軍隊を外国に送ることはなかつた」ということが、「平和
な国・日本」という美しい誤解になつてゐる。誤解にし
ろ、これによつて私たちが守られてきた歴史的事実を日
本人はもう少し誇りに思つていいのではないか。

世紀の大干ばつ

ちょうどアフガニスタンでは、タリバンを中心にして
曲がりなりにも戦乱がなくなりつつあつた。私たち
は、「これは診療活動を展開する上で好機だ」と思つて
いた。ところが、2000年に至つて世紀の大干ばつが
アフガニスタンを襲つた。2000年5月に発表され
たWHO(世界保健機関)は「現在進行中の中央アジア
の干ばつは、恐らく人類が体験したことのない規模で
進行するであろう。中でも最も激烈な被害を受けたの
はアフガニスタンで、人口の半分以上に相当する約1,
200万人が被災し、そのうち400万人が飢餓線上、
すなはち三度三度まともに「飯が食えない人が400
万人いる。ほつておけば死ぬだらう」という餓死線上の
人々が100万人いる」という警告を発した。しかし、
その声はほとんど世界に伝えられなかつたのである。

私たちの診療所の周辺でも、村落が目の前で消えて
いった。去年まで豊かな水田だったところが、今年は
乾燥地帯になつた。地域社会の基盤が崩れ、続々と難
民となつて出て行つたわけである。

日本では、政治難民のように伝えられたが、あとと
きに出てきた難民のほとんどはいわゆる災害避難民
だつた。あたかもアフガニスタン政府(タリバン政権)
の政策が悪く、人々が逃げてきたよくな都合のいい
宣伝がされたのが実態だつた。

診療所にやつてくる患者が次々と死んでいつた。
小さな子どもの死亡者が多かつた。水がなく、汚い生活
排水を飲むので、赤痢などのいわゆる腸管感染症にか
かりやすい。加えて、背後に栄養失調があつた。自給自
足だから、地域が干ばつで食べ物が収穫できなければ
、慢性的の栄養失調になる。そして、免疫力が落ちるの

で、簡単な病気で死んでしまうのだ。

あの当時発表された100万人が餓死寸前といふ
のは、こうした子どもたちを入れると、私は決して誇
張ではなかつたと思う。私たちは、残つた村人を集め
て、「病気は後で治せるので、水が先だ」と井戸掘りを
始めた。2000年8月のことだつた。これは3年前
まで継続され、約1,600カ所の水源を確保し、井戸
を再生し続けてきた。

アメリカがアフガンにもたらした「自由

2001年9月11日になつて、ニューヨークのテロ
事件が発生すると、干ばつに對する支援どころかアメ
リカのブッシュ大統領は、「十字軍を派遣してアフガ
ニスタンを空爆する」と堂々と言つた。私もキリスト
教徒のはしくれだが、自分がやられたからといって、
何万人も空爆で殺せ、などとは聖書に書いてない。十
字軍などという物騒な言葉は、聖書の中に一行も書
てないのだ。私は当時「戦争」ところではない。今アフガ
ニスタンに必要なのは水とパンだ」と主張した。私た
ちは職員の有志約20人をカーブル市内に送り込み、食
糧配給を行つた。当時、カーブル市民と呼ばれる人々
は国外に脱出しており、カーブル市内にいたのは、田
舎からの干ばつ避難民だつた。こうした人たち約1
00万人のうち、約1割は生きて冬を越せないだろ
うというのが私たちの予測だつた。それで、食糧配給
を急いだ。しかし、2001年10月に空爆が開始され
一方では爆弾が降り注ぐ。私があの當時偉いと思つた
のは、20人のアフガン人ボランティアだ。私ができた
のは、「とにかく分散して宿泊してくれ」と言うこと
だつた。3、4カ所に分宿して、例え1つのチームが空
爆で全滅しても、他のチームは食糧配給の事業を敢行

くつた。こゝへはペシャワールからジープで麓まで1
週間から10日かかる。そこから歩いて10kmある。

皆さんが映像で見るアフガニスタンの様子は、大き
な道路や大都市やその周辺で撮られた映像が多い。ア
フガニスタンの本当の姿は撮影するのが不可能な
かも知れない。しかし、今の報道は、例えば外国人が新
宿に来て1週間で帰つて「これが日本だ」と宣伝する
ようなもので、私たちはニュースを読むに当たつても
う少し謙虚でなければならないと思う。

その後、1988年5月からソ連軍の撤退が開始さ
れ、9ヶ月で撤退を完了した。ソ連軍の撤退の後、不思
議なことは外国人がいなくなると、騒乱も収まつてき
た。

私たちはそれに合わせて次々と診療所を開設して
いた。そうして年月が流れ、15年経つたところでは、先
が長いことを悟つた。ハンセン病は確かに先進国で
は「減少の傾向を示している」とか、「コントロールさ
れた」と発表されているが、実態はハンセン病が根絶
されたのではなく、ハンセン病の診療施設が根絶され
たのだ。つまり、世界的な話題になつてゐる間はその
病気に关心が集まり、発見率が上がるけれども、関心
がしほむと発見されなくなつてしまふ。実際、私たち
が診ていても減つたとは思えない。少なくともアフガ
ニスタンやパキスタンの北部の山岳地帯では、患者が
増えることはあっても、減ることはない。それで私たち
は、「1つの診療施設でもいいので、そこに張り付いて
じつと患者を診続けていく」ということで、199
8年4月、ペシャワールに病院を設立し、ここを基地
としてアフガニスタンとパキスタンにまたがりながら
活動を展開する体制を整えた。

するということで、みんな必死の覚悟で臨んだ。私たちの活動は、こういった同胞のためなら命も顧みない力強い職員たちの力もあり現在に至っているのである。これによつて約1800トンの小麦粉を配り、餓死寸前であった10数万人の人々に冬を越せるだけの食料を配つたのは、嘘のような本当の話である。

その後、カーブルが陥落する。米軍やその同盟軍が続々とカーブルに到着した。悪の権化タリバンを打ち破つて、正義と自由の絶対の味方アメリカ及びその同盟軍の進駐を歓呼の声で迎える市民たちという映像が繰り返し流された。これで世界中がだまされた。その後何が起きたのか。当時米国が言つていたように、いろんなものが自由になつた。何が自由になつたのかといふと、ケシ栽培だ。アメリカ軍による空爆の直前まで、ケシ栽培は絶滅寸前であった。タリバンの評価はいろいろあると思うが、ケシ烟の撲滅は評価していいだろう。見事にケシ烟がタリバン政権下で消えていた。良くも悪くも潔癖な宗教的政権であった。ところが、アメリカの進駐によつて、ただちにケシ烟が復活し、数年を待たずしてアフガニスタンは世界の麻薬の90%のシェアを占める麻薬大国に転落していった。それから女性にも自由が訪れたが、それは女性が外国人相手に売春をする自由だ。また、夫や働き手を失つた妻が街頭で乞食をする自由だ。貧乏人が餓死する自由だ。外国人におべつかを使うのが上手で、お金引き出すのがうまいアフガン人たちがますます大金持ちになつていく自由だ。これは、決して言いすぎではないと思つ。現地の人々なら「その通りだ。なぜそういうことが伝わらなかつたのか。」と言うに違ひない。

私たち、「これまでも方針を変えなかつたし、これからも変えない」と言って、活動を続けた。



写真5 筑後川の斜め堰



写真6 開通した用水路



写真7 マドラッサ

めに昔の人はどう工夫をしたのか、私たちが参考にしたのは江戸時代に確立された日本の取水方法である斜め堰というスタイルだ。

斜め堰というのは、九州の筑後川などでも利用されている(写真5)。斜めに堰上げると、高いところから取水できる。水は高いところから低いところに向かって流れるので、取水堰から取れる水は高いほどいい。さらに、洪水に対しては遊水地を儲けている。遊水池とは、洪水になると危険な場所に煙だけをつくつて、人を住ませないようにする場所のことだ。危ないところには住まないというのが昔の人の考え方だ。

日本人がかつて持つっていた治水の考え方は、自然とけんかをせずに同居するという考え方だ。アフガニスタンの激しい土石流や洪水に対しても、日本の知恵が生かされたのはそういうところだ。皆さん「日本がここまで大国として成長してきたのは、明治維新があり封建的

な古い日本を打倒して近代的な国家が誕生し、そして列強と伍するような技術力を身につけてきたからだ」と思つてゐると思う。私も学校ではそう習つた。しかし、本当にそうだったか。私はここに一つ日本人が置き忘れた大事なものがある気がする。それは、自然に対する考え方だ。

2007年4月に第1期工事の13kmが開通した(写真6)。みんな、これによつて多くの人々が帰つてくると喜んだ。実際、この用水路だけで10万人近くの人々が戻つてくることになった。

第1期工事の後、連続して合計25kmを目指して仕事を始めた。

マドラッサの建設

さうに、地域の中心であるマドラッサを作つた(写真7)。マドラッサというのは、モスクに附属した学校のことであり、これが伝統的なアフガニスタンの教育形態だ。日本でいうとお寺が教育を提供していた寺子屋に近い。マドラッサ付きのモスクの建設は、地域共

同体の要である。当時、タリバンと言えばテロの代表のように言われた。それを育てるマドラッサといつのは、テロリストの育成機関くらいにしかみんな思つてない。それが、地元の人たちにとっては屈辱的だつたのだ。それで、誰も建てる者がいないなら私たちが建てようと、3年前から建設を始めて、今年の4月30日にやっと竣工した。

こうして地元の人々が融和できる1つのセンターといふべきものを建設した。外国人の多くは眉をひそめたけれど、アフガン人は、政府・反政府を問わず、みんな狂喜した。当時、私たちが「マドラッサを作ろう」と言つたときに、地元の人たちが「これで解放された」「これで自由になった」と言つた言葉が忘れられない。自由という言葉の意味が、私たちが使つて來た自由とは違つてゐると悟つた。

現在、マドラッサは教育の中心である。また、金曜日になると、住民が集まつて、地域のもめなどを解決するセミナーにもなつてゐる。

国民学校ももちろん大事だが、マドラッサの利点は戦争孤児やみなしち子を引き取つて育てられる」とだ。しかも、地域の敬虔なイスラム教徒が自分で運営するのも普通の学校と違う点である。

に、用水路建設に至つたわけである。

大河川からの取水については、おそらく千級のこそアフガニスタンの再建の力半だということで、灌漑事業を始めた。

数年前まで緑豊かな田園地帯だった場所が砂漠化していつている。こうした現実は、ほとんど日本に知られていらない。聞くのは戦争の話ばかり。米軍がいともなくてもいいから、とにかく地域の住民の生活をどうするのか、命をどう保障するのか、というのが私たちの正直な気持ちだ。

アフガニスタンでの米軍などの軍事活動に賛成するたちは、「向こうで働いている職員たちが危ない。実際にペシャワール会の伊藤君もそうやつて死んだのではないか。それを守るためにわれわれは軍隊を派遣する」という。当時、日本ではしばしば行われた議論だった。しかし、実際は逆だ。私たちが、今まで何事もなく働いていたところに、外国軍が進駐してきたり、民間人が軍事目的で入つて来たことで、そこが戦場になつてしまつたというのが実際だ。その証拠に、私たちは地元の政治勢力から襲撃されたことは一度もなつたが、米軍から機銃掃射を受けたことはある。

第1期用水路建設

アフガンの農村、特に山村部で一般的だったのは、地下水を利用したカレーズと呼ばれる灌漑方法で、これはイランのカナートを小規模にしたものだ。名前はカレーズでもこれが枯れる(笑)。

私たちは初めカレーズの再生に熱中していた。しかし、掘つても掘つても地下水の水位そのものが下がつていて、なかなかうまくいかない。それで、地表水の利用を考えた。すなわち雨水や雪解け水を利用するため

に、蛇籠を使つた。蛇籠の中にはコンクリートを詰めた柱などにはコンクリートを使つたが、水路の大半はがこに石を詰めた蛇籠を使い、手作業で建設した。

この蛇籠は非常に強い。まず、籠に入れた石はコンクリートと違い割れない。壊れることもほとんどない。例え壊れても、籠を1つ担いで行って石を集めれば、地元の人でも簡単に補修ができる。私たちの蛇籠は、現地の農民たちが自分で編んだものだ。

用水路の生命線は取水堰だ。自然と人工の接点がござつても掘つても地下水の水位そのものが下がつていて、なかなかうまくいかない。それで、地表水の利用を考えた。すなわち雨水や雪解け水を利用するためがるから、洪水が起つりやすくなる。それを避けるた

に、用水路建設に至つたわけである。

大河川からの取水については、おそらく千級のこそアフガニスタンの再建の力半だということで、灌漑事業を始めた。

山々から流れる雪の水はそう枯れないだろう。中小河川については無数のため池を作り、大河川沿いについては大河川からの取水をする。これ以外にアフガニスタンが生き延びる道はないだろうというが私たちの基本的な考え方で、その第一弾として2003年3月に着工したのがマルフリード用水路だ。

言うのは簡単だが、實際に行うのは非常に難しい。地表水を利用して、農業を復興するために用水路建設を行うと言つても、それは理想だ。最初は、一体どうやって作つたらいいのか分からなかつた。重機も初めのころはまともに手に入らなかつた。ダンプカーもなかなか手に入らない状態の中で、頼るのは人力だった。今でこそ、多くの重機を使って仕事ができるようになつたが、初めのころに私は、恐らくこの用水路は、物のない状態の中で何百年も使われ続けなければならぬと、真っ先に考えた。それで、地元の人たちが自分の手で、自分のできる範囲で、なるべく手作業で補修もできなければいけないということを念頭に置いて、手作りの水路を目指した。水門などの構造物の柱などにはコンクリートを使つたが、水路の大半はがこの中に石を詰めた蛇籠を使い、手作業で建設した。

この蛇籠は非常に強い。まず、籠に入れた石はコンクリートと違い割れない。壊れることもほとんどない。例え壊れても、籠を1つ担いで行って石を集めれば、地元の人でも簡単に補修ができる。私たちの蛇籠は、現地の農民たちが自分で編んだものだ。

用水路の生命線は取水堰だ。自然と人工の接点がござつても掘つても地下水の水位そのものが下がつていて、なかなかうまくいかない。それで、地表水の利用を考えた。すなわち雨水や雪解け水を利用するためがるから、洪水が起つりやすくなる。それを避けるた